

サロンでの気づき

サロンを訪問させて頂き、気づいたこと、聞いたことなど、お伝えしたいと思います。何かお役に立てれば嬉しいです。



3月に入ってもまだまだ寒い日が続きますが、近所の方につくしをいただき、佃煮にしておいしくいただきました。いい季節になりましたね。

休日に広島県三次市にある奥田元宋・小由女美術館に行ってきました。昭和を代表する写真家、土門拳(1909~90年)の功績を紹介する企画展「土門拳の昭和」が行われていたからです。

写真のことは全然わからない私ですが、作品を見ていると氏の思い、執念、迫力に圧倒されてしまいました。入館の時にいただいたパンフレットの中に書いてあった氏の「写真の立場」というメッセージをご紹介します。



写真の立場、

実物がそこにあるから、実物をもう何度も見ているから、写真はいらないと云われる写真では、情けない。

実物がそこにあっても、実物を何度見ても、実物以上に実物であり、何度も見た以上に見せてくれる写真が、本物の写真というものである。

写真は肉眼を越える。

それは写真家個人の感覚とか、教養とかにかかわらない機械(メカニズム)というもつとも絶対的な、非情なものにかかわる。時に本質的なものをえぐり、時に瑣末なものにかかずらおうとも、機械そのものとしては、無差別、平等なはたらきにすぎない。

そこがおもしろいのである。

写真家は、機械のうしろに、小さく小さくなっている。写真家が小さくなって、ついにゼロになることは、なかなかむずかしい。せいぜいシャッターを切るとき、あっちの方を眺めるぐらいなものだ。

写真の中でも、ねらった通りにピタリ撮れた写真は、一番つまらない。

「なんて間がいいんでしょう」という写真になる。

そこがむずかしいのである。

■臨店講習について

さて、当社ではサロン様と同じ目線に立って、サロンサポートの一貫としてパーマ、カラー、店販売上アップのための臨店講習を当社インストラクターと繁盛サロンのトップスタイリストの方のご協力をいただき行っております。

先日、スタイリストの方にパーマの臨店講習をしていた

できました。カウンセリングの時のポイントからはじまって、シャンプーのテクニック、こだわり、お客様へのトークなどサロンで実践しておられることと同じ流れでやって頂きました。講習後のサロン様の感想ですが、パーマ剤の使い方、活用の仕方など勉強になったのはもちろんのこと、講習をされたスタイリストの方がお店のオーナーの考え方、こだわりをしっかりと理解していることが伝わってきたことをあげていました。基本の動作がきちんとできていること、礼儀礼節ができていること、良いことは長年やり続けていることなどバラバラでなく、同じベクトルを向いて仕事をしていること。にサロンの強さを感じておられました。今回お手伝いいただいたスタイリストの方は、はじめての講習だったのでごく緊張して、シャンプーの時、滝のような汗をかいておられましたが、一所懸命に講習をしていただき、本当にありがとうございました。このような臨店講習をどんどんさせていただきたいと思います。ご遠慮なくお申し付け下さいませ。

■言志四録について

続きまして、先日行われた亀山先生の勉強会で学んだ「言志四録」についてお伝えさせていただきます。江戸末期の儒学者、佐藤一斎が後半世の四十余年に渡って記した随想録です。

佐藤一斎とは、幕府直轄の教育機関であった昌平坂学問所のトップで、日本における儒学の大成者として大変尊敬されていた人で、その門下には数千人が学んだそうです。その中には、佐久間象山や横井小楠らがいます。「言志四録」は指導者の為の指針の書。西郷隆盛が終生、愛読したそうです。西郷隆盛は1133条からなる『言志四録』から101条を抜き出し、何回も書いてその身に覚えさせていたそうです。西郷が選出したものを「南州手抄言志録」といい、座右の戒めとし、己を律する基準にしていたそうです。勉強会では8か条を教えていただきましたが、その中の5か条を紹介させていただきます。



●言志録第二条

凡そ事を作すには、須(すべか)らく天に事(つか)うるの心有るを要すべし。人に示すの念有るを要せず。

(訳)全て事業をするには、天に仕える心を持つことが必要である。人に示す気持ちがあってはならない。

世間の評判を気にして、人の目にどう映るかを考えているようでは事は成せない。事を為すとは天を相手に生きること。

昨今の風潮として、自分の身近な身内の為に生きることが必要以上に美化されている。目の前の人を大事にできなくて、どうして赤の他人を大事に出来るか?→しかし、事をなそうとするなら、少なくとも「天を相手に生きる」ことを最優先にしないと何も出来るものではない。

●言志録第五条

憤の一字は、是れ進学の機関なり、舜何人ぞや予(われ)何人ぞやとは、方(まさ)に是れ憤なり

訳)何かに対して奮い立ち、発奮する心こそ、学問を極めていくための大切なことである。いや、学問だけではないすべての事柄においてそれを成し遂げようと思うならば、『憤』の一字が大切なのである。かつて孔子の愛弟子顔淵が『聖人であった舜も俺も同じ人間じゃないか。舜がやれたのなら、俺もやれるはずだ。だからこそ、俺は自己修養に励むぞ!』と語ったように『憤』という『燃える何か』が私たちには必要である。

※「舜」とは、儒家の者から神聖視されている五帝のうちの一入である。

「志(燃える何か)」さえ失わず、努力し続ければ、必ず、成し遂げることができる。「燃える何か」を抱く人は、積極的に思考し、積極的に行動する、真に「こころ元気」な人である。

学ぶ目的が、金持ちになること、有名になることで、自分の中に大きな志を持っていなければ、仕事は遊ぶ為の手段となり、仕事に対する責任感、社会人としての責任感など持つことはできない。一流の会社にしていくには、一流足らしめる社員教育が必要である。「どうせ我社は二流か三流…」という意識を持った時に実際は四流、五流へと落ちている。「我社こそ業界の中で一流だ」という意識を持ち、会社全体の質の向上を高めていく事が大切である。スタッフが「自分もこのオーナーのようにになりたい」と「憤」の一字を持たせることの出来るオーナーであって欲しい。

●言志録第八十八条

着眼高ければ、即ち理を見て岐せず。

訳)出来るだけ大所高所に目をつければ、道理が見えて、迷うことがない。

人は、自分の利益を自分の快樂にだけ直結させていると、どうしても視野が狭くなっていきます。ですから成長するとともに、意識的に視点を少しずつ上へ持っていくようにすることが大切です。そうして視点が高くなれば、全体と自分の関係が見えてくるので、自分の利を捨ててでも全体にとって利となることをするのが、最終的にはプラスになるのだということがわかるようになるということです。

●言志録第四十一条

富貴は譬えば則ち春夏なり。人の心をして蕩せしむ。貧賤は譬えば則ち秋冬なり。人の心をして肅ならしむ。故に人、富貴に於ては則ち其の志を溺らし、貧賤に於ては則ち其の志を堅うす。

訳)金持ちとか、身分が尊いとかは、たとえると春や夏の気候のようなもので、人の心をとかす(怠けさせる)貧乏であるとか、身分が低いとかは、たとえば秋や冬の気候の様なもので、人の心を引き締める。すなわち人は富貴にあつてはその志を薄弱にし、貧賤にあつては、その志を堅固にする。

人は上り調子の時は、つい気が緩んでしまう。下り調子の時は、つい僻(ひが)み心を持ってしまう。

外にどんな風が吹いても自分の心までゆれないようにするにはどうすればよいのか。

それは、どんな時にあつても志という目には見えない指をすくつと一本立てるかかどうかということ。今日の覚悟を明日忘れてはいけない。いかなる時、処、地位にあつても気の緩みを締め、妬みを抑え、何をすべきかに心を馳せることが大切である。「初心忘れべからず」という言葉がありますが、入社当時の意気込みが、十年、二十年経つても尚、持続できるだろうか。部下を持つようになってその時の気持ちを忘れずに持ち続ける者は、部下の気持ちをくみ上げることが出来る上司になれる。日常的な生活の中で、責任と感謝、恩と恥を知ることで、人は揺ぎない道を歩んでいくことができる。

●言志録第四十三条

昨の非を悔ゆる者は之れ有り、今の過(あやまち)を改むる者は鮮(すく)なし。

訳)過去の非を後悔する人はあるが、現在していることの非を改める人は少ない。

つつい「仕方がない」と自分自身に言い訳をしてしまう。非はあくまでも非であつて、そこには一切の言い訳も成立しない。現在を改められない者が、どうして過ちを繰り返させないといえようか。「君子豹変、小人は面(おもて)を革(あらた)む。」という言葉がありますが、間違いに気づくと、君子とよばれる立派な人物は、自らの考え、行動をきっぱりと改め、すぐに変化します。それはまるで、豹の毛皮のようです。しかしながら、小人とよばれる人物は、物事の真相が理解できないため、うわつつらだけを改め、表面だけを変化させます。根っこのところは同じままなので、また、すぐにもとの状態に戻ります。

言志四録には、このように人生の指針になることがたくさん書かれています。

以上、ご参考にしていただければ幸いです。

今月も明元素で頑張ってくださいませ!